

琉球大学学術リポジトリ

琉球語におけるナ行エ段音の変遷

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石崎, 博志, Ishizaki, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20351

琉球語におけるナ行工段音の変遷

On the changes in n-line e-row in Ryukyuan language.

石崎 博志

ISHIZAKI Hiroshi

はじめに

本稿の目的は琉球語を記録した文献資料を用い、琉球語のナ行工段音が歴史的にどのような変遷を辿ったのかを明らかにすることである。冒頭でこれまでのナ行工段音に関する説を遡りながら祖述するが、まずは1876年生まれの伊波普猷(1975)に登場してもらおう¹。

両先島群島及び奄美大島群島ではeから来たiに対して、在来のiはĩ(露語のbi)になる。沖縄本島でも、一時代前までは此の間に幾分の区別があり、今でも在来のiの前の子音は大方palatalizeするなどの如く、eから来たiと心持区別される。例へばケ、ネは[ki, ni]だが、キ、ニは[tʃi, pi]である。

¹ またp.8には以下のようにある。「先年啓明会の琉球講演会の時の私の講演の速記を見て驚いたことだが、固有名詞中のolは大方uになつてゐた。だが、elはさう発音しにくい音でもないので、速記者の聴覚印象にもさう変には響かなかつたとみえて、iにはなつてゐなかつた。」兎に角、eから来たiと在来のiとの間に、一世紀前まで区別があったことは、古老の語るところで、この区別が既に島袋源七君が採集した山原の方言中に見いだされるのも、注意すべきことである。又これはイ列の子音に、二三口蓋化したものがあつて、発音の際に、口腔が狭くなるのでも、証明することが出来よう。例へば、ケ・ゲがki・giとなるにつれて、キ・ギはchi・jiとなり、ネがni(印欧語の如き)となるにつれて、ニはnĩ(国語の如き)となるのである。六十台以上の人は、大方niとnĩとを区別してゐるが、六十台以下の人は、両方を混同して、一様にniと発音し、国語流のニ(nĩ)は、特に陰を隠さうとしてゐる。けれども、組躍の台詞では、古来この二者の区別がやかましかつたので、古典劇の役者達は、若い者でも、之を使ひわけてゐる。其他、両先島及び奄美大島で、eがĩとなり、iがĩとなるのも、其の傍証とすることが出来よう。このĩがロシヤ語のbiと全く同一のものであることは、〔ニコライ〕・ネフスキー氏の裏書きするところ、これに似たのが、東北方言にあるのも注意すべきである。(『琉球戯曲考』(1938))

実際に伊波普猷(1976)では後述のごとくネを[ni]、ニを[ni]²という形で両音を区別している³。そして、B.J.ベッテルハイムの『英琉辞書』"English-Loochooan dictionary"(1851)では、日本語のナ行工段音とイ段音は/ni/と/nyi/という形式で明確に区別している⁴。さらに李鼎元『琉球譯』(1800)においてはナ行工段音とイ段音の間に寄語の使い分けが見られ、ナ行工段音に由来する琉球語に対しては“你”が独占的に用いられ⁵、ナ行イ段音に対する音訳字には“你”は用いられずに、“宜”と“泥”が使用されている。

一方、近年、琉球語の歴史を研究した多和田2010を肇とする研究では、ナ行工段とイ段音は「語音翻訳」(1501)では分けられ、「琉球館譯語」(成立年不詳)の段階ですでに合流し、丁鋒2008でも同資料から工段とイ段が合流していたとしている。その後の漢語資料においても同様の現象が見られることから、それ以降もナ行工段とイ段については合流したとみなされ、特に言及されていない。また、『おもろさうし』を分析した高橋俊三1991では以下のように述べる。

接尾敬称辞の「かね」について『混効験集』は「童名の下に付る詞。たとへば太郎かね松かね之類也」と記している。普通「金」を宛てている。伊波普猷は、これら敬称の接尾辞「がね」は国語の「髻がね」「君がね」等と同語とする(「琉球人の命名法」)。これらのことからすると「わりかね」の「かね」と「たらかに」の「かに」の表記は混用例ということになる⁶。

琉球語を記した文献をもとにした先行研究の結果を総合すると、「語音翻訳」(1501)に存在した区別が、陳侃「夷語附」(1535)や「琉球館譯語」においてナ行工段とイ段が合流し、その後、李鼎元『琉球譯』(1800)やベッテルハイム『英琉辞書』(1851)あるいは伊波普猷の発音では両音の区別が「復活」していることになる。

² 有声歯茎鼻音[n]の口蓋化は資料によって表記が異なるが、本稿では[n]に統一する。

³ 伊波普猷(1975)(1976)参照。

⁴ 伊波和正(1998)参照。/nyi/は口蓋化した有声歯茎鼻音[ɲ]を表すと思われる。

⁵ 石崎(2001)参照。

⁶ 伊波普猷は「西暦十五世紀の中葉(即四百五十年前)のオモロに、(中略)「九年母」を「くにぶ」とした例がある」と述べている。(「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」)

表 1

	語音翻訳	陳侃・琉球館訳語	ベッテルハイム	現代首里方言
ナ行工段音	nī ⁷	ni(もしくはni)	ni	ni
ナ行イ段音	ni		ni	

前の時代にすでに失われている区別が後の時代に新たに分けられる状況は、言語の歴史一般からすると些か不自然である。一般的な言語変化として、ナ行工段とイ段は表2のように(1)>(2)>(3)の三つの段階を経て現在に至ると考えられる。つまりナ行工段は母音の狭母音化およびその後の口蓋化を経て、イ段とは口蓋化した時点で合流し、現在に至る。(3)第3段階は現代、(2)第2段階は上記のベッテルハイムの『英琉辞書』の段階を反映する。

表 2

	(1)第1段階	(2)第2段階	(3)第3段階
ナ行工段音	[ne]([nr])	[ni]	[ni]
ナ行イ段音	[ni]([ni])	[ni]	

漢語資料が記述された時、琉球語のナ行工段とイ段が表2の(2)第2段階であったら、果たして漢語資料の記述者は両者を弁別し得たであろうか。同様に『おもろさうし』の「かね」・「かに」の表記は如何なる意味をもつのであろうか。1501年から1851年までの資料ではナ行工段音がどのような語に、どのように記述されているのか。これらを再検討し、琉球語を記してきた資料の特質を考察するのが本稿の役割である。

1. 所拠文献と分析対象項目

本稿で使用する文献は、成立年代が明確なものを優先的に使用する。具体的には以下の諸本である。本稿では対訳(対音)資料と仮名資料を分けて論じる。

1501年『海東諸国紀』「語音翻訳」

⁷ 「語音翻訳」の音価は多和田2010による。同書によると「琉球館譯語」以降の全ての資料でナ行工段とイ段は区別されていないことになる。丁録2008、多和田2010は琉球語の通史を論じるも、ベッテルハイムの『英琉辞書』は扱っていない。

- 1535年(嘉靖十四年)陳侃、高澄編『使琉球録』付録「夷語」「夷字」
- 1561年(嘉靖四十年)郭汝癸編『使琉球録』「夷語附」
- 1579年(萬曆七年)爾崇業・謝傑編『使琉球録』付録「夷語」「夷字」
- 1596年(萬曆二十四年)劉孔當編『海篇心鏡』「夷語音鐸」
- 1606年(萬曆三十四年)夏子陽・王士禎編『使琉球録』付録「夷語」「夷字」
- 1664年(康熙三年)張學麗著『中山紀略』
- 1711年『混効驗集』
- 1721年(康熙六十年)徐葆光編『中山傳信録』
- 1764年(乾隆二十九年)潘相編『琉球入学見聞録』「土音」「字母」「誦聲」
- 1800年(嘉慶五年)李鼎元編『琉球鐸』
- 1818年『漂海始末』
- 1818年 Basil Hall "*Account of a Voyage of Discoverly to the West Coast of Corea and the Great Loo-choolsland*" 所収の"Vocabulary of the Language spoken at the Great Loo-Choo Island"
- 1851年Bernard Jean Bettelheim "*English-Loochooan Dictionary*"
(『英琉辞書』自筆稿本、大英図書館蔵Or.40)
- 1880年沖繩県庁編『沖繩對話』
- 1895年Basil Hall Chamberlain(1895) "*Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan Language*"
- 1932年伊波普猷『琉球語大辞典〔草稿〕』
- 1933年Charles Haguenuer "*Okinawa1930. Notes ethnographiques de Charles Haguenuer.*"

ただ、上記のうち漢語資料は継承性が強く、先に成立した資料をもとに編纂されるため、編纂時に付けられた音訳とは言えないものも数多い。よって本稿では当該資料で新たに付けられた項目や寄語を考察対象とし、前の資料から引き写した項目に関しては参考にとどめる。また、原文中における誤字や寄語と琉球語の同定ができない、あるいは未確定ものは、ひとまず考察対象から除外する。よって主な考察対象となるのは、陳侃『使琉球録』「夷語」(1534)と徐

葆光『中山傳信録』「琉語」(1716)、『琉球入学見聞録』(1768)の各書における新出項目である。

2. 対訳資料におけるナ行工段とイ段

2.1 『海東諸国紀』「語音翻訳」におけるナ行工段音

まず『海東諸国紀』「語音翻訳」(1501)からみてみよう。「語音翻訳」には直接、ナ行工段音を表す音節はない。しかし、“苦”리가사/rikasa/、“頭”가난우/kanazu/、“花”파라/hara/、“姐姐”아르/arui/、“飯”움바리/umpari/のようにn音をr音と混同して記述した例が散見される。このなかで「あね」を意味する“姐姐”には아르/arui/という形で/-ui/という母音がナ行工段音に、「ウバニ」を意味する“飯”が움바리/umpari/という形/-i/が使われている。ひとまずこれらのr音をn音の誤記とすると、ナ行工段音はイ段音とは区別されていたことになる。

ではそれはどのような音声的区別であったのだろうか。ハングルをローマナイズした形を額面通りに受け取るなら、ネに対して/nui/、ニに対しては/ni/という形で、両者は母音で区別されていたことになる。さすれば、音韻的区別としては多和田2010のようにネは/ni/、ニは/ni/という区別になるが、これが音声的区別であった場合、果たしてこのような微細な母音のみの違いを現実に弁別し得たかは疑問が残る。

かりに「語音翻訳」の時代における琉球語のナ行工段とイ段の区別が、表2の(2)第2段階で、工段[ni]、イ段[ni]という形であったらどうだろう。ハングルでは/n/音には一種類しかなく、両音を子音の違いとして表現することは不可能であり、母音の違いとしか表すことができない。これはハングルの限界でもある。

一方、現代方言に目を向けるとその音声的実態が垣間見られる。上野(1992)は奄美方言の喜界島方言の調査報告⁸で、ナ行工段音に対しては/nɪ/、イ段音

⁸ 本書は「音韻表記に徹すると、研究者の解釈に依存する部分や覆い隠されてしまう音声事実が多くなるので、もう少し具体的なレベルに降りた表記をねらう。」とし、精密な音声の記述を目指して行われている。

に対しては/nji/という表記を用いている(p.58「金(錢)」「蟹」)。この表記の説明(p.46)では、iの口蓋化音を/i/とし、nj-の音声説明では「二(ヤ)の子音-nj」としている。すなわちIPA2005年改訂版で示すとナ行工段は[nɪ]、ナ行イ段は[ni]という表記になろう。

「語音翻訳」のナ行工段とイ段は実際には、奄美方言にみられるような母音にも、子音にも違いが見られるような音声であったのではないだろうか。ナ行工段を示す母音/uii/によって写し取られたのは[i]よりも若干中寄りで広めの、[i]の口蓋化音[i̠]であった可能性がある。

資料的証拠をより重視するなら“姐姐”“飯”の例を以て、両音は区別されていた可能性があるとするのが妥当である。しかし、これは誤記を訂正した上での考証であり、語料も稀少である。上記の例だけではやはりナ行工段やイ段の音節全体を論じることは難しい。ナ行工段とイ段を考察する際、「語音翻訳」の扱いは条件付きの、限定的な扱いにすべきであろう。

2.2 陳侃『使琉球録』「夷語」におけるナ行工段音

2.2.1 「夷字」

次に漢語資料である陳侃『使琉球録』「夷語」を見てみよう⁹。まず「夷字附」は「いろは」を示した仮名に漢字を当てたものである。

い(以)、ろ(路)、は(罷)、に(尼)、ほ(布)、へ(比)、と(度)、ち(知)、り(利)、ぬ(奴)、る(而)、を(倭)、わ(哇)、か(加)、よ(有)、た(他)、れ(呂)、そ(蘇)、つ(子)、ね(尼)、な(那)、ら(刺)、む(武)、う(烏)、ゐ(倚)、の(怒)、お(窩)、く(古)、や(牙)、ま(未)、け(去)、ふ(不)、こ(孤)、え(依)、て(的)、あ(悪)、さ(沙)、き(其)、ゆ(又)、め(未)、み(美)、し(實)、ゑ(泄)、ひ(亦)、も(母)、せ(世)、す(是)。

丁鋒2006によると、これらは陳侃の故郷浙江省鄞県(現在の寧波市)の明代の方言に基づいているとしている。仮名と漢字との対応で特徴的なのは仮名のマ行ウ段とマ行工段に中古の微母字が用いられていることである。明代の寧波方言の資料がないので、現代寧波方言を参照すると以下のようにになっている。

⁹ 陳侃「夷語」と「琉球館譯語」の先後関係については胤森1993、石崎(2001a)

マ：末/meʔ/ ミ：美/mei/ ム：武/fu/ メ：未/mi/ モ：母/該当字なし/

琉球語のメはミよりも広い母音が想定されるが寧波方言ではミ音に対する漢字音がかえて広く、ア段に近い母音になっている。“武”も現代音は軽唇音化を経て/fu/となっており、ム音の子音/m-/とは径庭がある。明代と現代の寧波には歴史的変遷が当然あると考えられるが、如上の対音から即座に寧波と断定することは難しい。

夷字附の末尾にはこれに関わった人物の職名と名前が記されている。

廣信府同知 鄒潘

推官 方重

臨江府推官 袁長馭校正

上饒縣學教諭 余學申對讀

湖州府後學吳仕

寧波方言は呉語太湖片甬江小片に属する。廣信府は江西省上饒市信州区、臨江府、上饒縣はいずれも現在の江西省に属するが呉語を使用し(呉語処衢片龍衢小片)、湖州府は北部呉語の地域である(呉語太湖片湖州小片)¹⁰。「夷語」に関わった人物の来歴からは確かに呉語との関連が伺えるが、直接記述したかどうか分からない者の出身地を寄語の基礎方言だとするのは危険である。とりあえずは基礎方言を呉語と措定せずに、中古音との対応からナ行工段とイ段を考えていきたい。ナ行工段音とイ段音は次のような漢字で示されている。

表 3

	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行
イ段	其	実	知	尼	庇	美	椅	利
エ段	去	世	的	尼	比	未	泄	呂

ナ行の工段とイ段のみが同一の漢字“尼”が当てられ、両者に区別がないように見える。他の漢字をみると、イ段音には、“其”(群母之韻)、“知”(知母支韻)、“庇”(幫母至韻)、“美”(明母脂韻)、“椅”(影母支韻)、“利”(来母至韻)、“尼”(娘母

¹⁰ 錢乃榮(1992)参照。

脂韻)など平水韻では支紙寘韻に属し、中古以降に/i/音になった支脂之韻の漢字が選ばれている。対する工段音には中古の“去”(溪母御韻)、“呂”(来母語韻)など魚韻字、“未”(微母未韻)の微韻字、“世”(書母祭韻)、“泄”(以母祭韻)、“的”(端母錫韻)、など支脂之韻以外の漢字が選ばれる傾向がある。中古の対応からは「夷字」をみる限り、工段とイ段は全体としては分けられる傾向にある。

因みにマ行工段つまり「メ」に対して“未”が用いられているが、微母字が両唇破裂鼻音をもつ現代漢語方言は温州白読音[mei]、福州白読音[muei]、建甌[mi]、広州[mei]など呉語、閩語、粵語の地域である¹¹。例えば現代福州方言の読音では、美[mi]/未[muei]という違いを有しており、他の音節も以下のようにになっている。表中「/」で区切られるものは「文読音/白読音」を表し、口蓋化した[n]は[ɲ]で示す(以下同じ)。

表 4 福州

	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行
イ段	其ki	実siʔ	知ti	尼nɛ	庇	美mi	倚i/ai	利lei
工段	去kʰɔy	世sie	的teiʔ	尼nɛ	比pi	未muei	泄sieʔ	呂ly

表 5 温州

	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行
イ段	其dzɿ	実zai	知tsi	尼ɲi	庇なし	美məi	倚i	利lei
工段	去kʰy/kʰai	世sei	的tei	尼ɲi	比pei	未mei ¹¹	泄	呂ləy

表 6 寧波

	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行
イ段	其	実zɕeʔ ¹²	知	尼ɲi	庇	美mei	倚	利li
工段	去tɕʰy	世sʔ	的tiɪʔ	尼ɲi	比pi	未vi/mi	泄	呂

2. 2. 2 「夷語」

次に「夷語」を見てみよう。「夷語」は漢語の提示語に対し、割注で琉球語

¹¹ また「む」に対して“武”(微母)が当てられるが、“武”を両唇破裂鼻音で発音するのは粵語の広州、陽江などで/mou/と発音され、温州、蘇州、梅県では/vu/である。呉語の地域も陳侃の時代には/m-/で読んだ可能性がある。

¹² 銭は[dzʔiɪʔ]

音を漢字で表している。本稿では関連項目を以下の凡例のように示し、適宜注釈をつける。

【凡例】鼠(ネズミ)：聶/ni/

“鼠”は漢語の提示語、(ねずみ)は提示語の日本語訳、“聶”は寄語(音訳字)で、後ろの/ni/は『沖縄語辞典』による現代首里方言を示す。

【ナ行工段】

鼠(ねずみ)：聶/ni/

船(ふね)：福尼/funi/

金(こがね)：孔加尼/kugani/

金鍾(金のお椀)：孔加尼麻加里

銅(あかがね)：嗑^{ママ}加加尼

鐵(くろがね)：谷禄嗑尼/kurukani/

錫(しろがね)：失禄加尼/sirukani/

用例をみると“金”“金鍾”“銅”“鐵”“錫”の例は「カネ」を使った複合語であり、実質的には考察の対象となるのは“鼠”“船”“金”三語のみである。

【ナ行イ段】

天(てん)：甸尼/tin/or/teni/

西(にし)：尼失/nisi/

錢(ぜに)：熟尼/zin/

鈔*：支尼/zin/

貳錢：尼買每

【未詳語】

霞(かすみ)：个嗑尼

ナ行工段音は主に“尼”字(娘母脂韻)が使われ、これはナ行イ段音に対しても

用いられている。“尼”字は“西：尼失”、“貳錢：尼買每”以外は¹³語中、語尾に使われている。やはりここでも、両音には区別が付けられていないように見える。一方、“天”をそのまま「テニ」と解釈しても問題はないと思われるが、陳侃に先立つ「語音翻訳」では“天”を𪛗と書き、末尾が撥音になっている。また「玉陵の碑文」(1501)年には「てんにあをき、ちにふしてたたるへし」とあり、「天に仰ぎ、地に伏して」と呼応するため、ここでの「天」は撥音表記であると考えられよう。“天：甸尼”の“尼”が果たして[-n]を示すのか、[ni]を示すのかはやはり問題となろう。実際に漢語方言には“尼”を声化韻の[ŋ]で読む地域もある。同様の問題は『中山傳信録』の“鏡”の項目でも現れる。

ナ行工段専用の寄語は“聶”(娘母葉韻)のみである。現代方言において“聶”と“尼”字が声調を除く同じ音価を持つのは浙南呉語のみで、その他の方言においては、以下のように何らかの区別がある。

表7

	北京	蘇州	温州	長沙	南昌	梅県	福州	廈門	広州
聶	nie	nir?	ɲi	nie	niet	niap	nie?	liap	nip
尼	ni	ɲi	ɲi	ɲi	ɲi	ni	nɛ	ni	nei

2.2.2 陳侃「夷字」「夷語」まとめ

資料から帰納すると、陳侃では「夷字」「夷語」ともにナ行工段とイ段を区別して用いている兆候は見られない。「夷字」「夷語」ともにナ行工段音とイ段音に“尼”が使われていることがその根拠である。ただ、実質的な語料が少なく、さらに使用される用字も両音に共用される寄語が“尼”だけという状況では、やはり音節全体にまでこの結果を敷衍することには躊躇せざるを得ない。陳侃の時代、表2における(2)第二段階であった場合、両音を区別し得たか否かも、やはり問題であろう。たとえそれが可能であったとしても、それが唯一発揮されたのは“鼠：聶”の用例に限られるため、やはり決定的な根拠としては弱いと言わざるを得ない。

¹³ 寄語の当て間違いであるが、“葉：尼”という例もある。これは“葉”を“根”と取り違えた可能性が高い。

2.3 『中山傳信録』(1716)

2.3.1 「字母」

『中山傳信録』「字母」ではエ段音ネに対しては“你”、ナ行イ段音ニに対しては“義”と異なった字が当てられている。この点は、同じ漢字を使っていた陳侃「夷字」とは状況が異なる。両者は中古の音韻位置も異なり、“你”は泥母止韻上声、“義”は疑母寘韻去声で、これを蘇州語で読むと¹⁴ “義”(ニ)は/ni/、“你”(ネ)は文読音で/ni/(白読で/ŋ/)と、口蓋化の有無という形で声母に違いを有している。ナ行イ段が口蓋化している点も伊波普猷の証言や上野(1992)と一致している。念のため他の方言もみてみよう。温州、南昌を除けば、両者の音声は異なっている。

表8

	北京	蘇州	温州	長沙	南昌	梅県	福州	廈門	広州
你(ネ)	ni	ni/ŋ	ni	ni/ŋ	ni/ŋ	ni/ŋ	ni	ni/li	nei
義(ニ)	i	ŋi	ni/ŋ	ni/ni	ŋi	ni	ŋie	ŋi	ji

結論としては、「字母」をみる限り、ナ行エ段とイ段は使い分けられている。

2.3.2 「琉語」

では、漢語に対する琉球語音を漢字で示した「琉語」ではどうなっているか。同書「字母」でナ行イ段に用いられた“義”の寄語は用いられていない。

器用門に二カ所にわたり“船：胡你”と“船：莆泥”の二つの寄語が使われている。夏子陽に“船：莆尼”の用例があることから、『傳信録』で新たに加えられたのは“船：胡你”である。寄語“你”も『傳信録』初出の寄語であるが、用例としてはこの一例のみである。

【ナ行エ段音】

船(ふね)：胡你/huni/

船(ふね)：莆泥/huni/

¹⁴ 『中山傳信録』の新出寄語の基礎音系については石崎2010を参照。

胸(むね)： 叺尼/nni/
金(こがね)： 枯軋膩/kugani/
銀(かね)： 喀膩/kani/
銅(あかがね)： 阿里喀膩
鐵(くろがね)： 窟碌喀膩/kurukani/
錫(しろがね)： 右¹⁵碌喀膩/sirukani/
酒盃(さかづき)： 失六加泥/sirukani/
鼠(ねずみ、ね)： 聶(前時代の資料からの継承項目)/nii/
金杯(金のお椀)： 孔加泥麻佳里(前時代の資料からの継承項目)
霞(かすみ)： 嚙喀泥(未詳語)

『傳信録』は陳侃「夷語」より“胸”の項目などが増えているが、やはり「カネ」を使った複合語が多く、考察対象となるのは“船：胡你”、“胸：叺尼”“金：枯軋膩”の項目のみである。

【ナ行イ段音】

北(きた)： 屋金尼失/nisi/
園(にわ)： 膩滑/niwa/
二月(二月)： 膩括子/nigwaç/
十二月(十二月)： 躑膩括子/zuunigwaç/
十一(11)： 之一子泥子/zuuiniçi/
十二(12)： 之泥泥子/zuuniniçi/
十三(13)： 之三泥子/zuusaNniçi/
十四(14)： 之?泥子/zuujuniçi/
十五(15)： 坐古泥子/zuuguniçi /
十六(16)： 坐六古泥子/zuurukuniçi/
十七(17)： 坐十七泥子/zuusiçiçi/

¹⁵ “右”は“石”の誤植。

- 十八(18)：坐晴之泥子/zuuhaçiniçi/
 十九(19)：坐苦苦泥子/zuukuniçi/
 二十(20)：膩徂/nizuu/
 二十三(23)：膩徂三泥子/nizuusanniçi/
 二十四(24)：膩徂晴介/nizuujukka/
 二十五(25)：膩徂姑泥子/nizuuguniçi/
 二十六(26)：膩徂六姑泥子/nizuurukuniçi/
 二十七(27)：膩徂失之泥子/nizuusiçiniçi/
 二十八(28)：膩徂晴之泥子/nizuuhaçiniçi/
 二十九(29)：膩徂苦苦泥子/nizuukukuniçi/
 西(にし)：尼失(繼承項目)/nisi/

事実上『傳信録』で最初に用いられる“膩”¹⁶はナ行工段音にもイ段音にも使われている。ナ行工段の場合は語尾のみに使われ、ナ行イ段では語頭のみで使われている。ナ行イ段音は数字に関する語を多く含むので、語彙のバラエティは稀少と言わざるを得ない。前時代の資料からの繼承項目である“西”は和語系統、『傳信録』で新たに付けられた“北”は琉球語が反映されている(“屋金”が何を意味するのか不明)。

上記にはないが、注目に値するのは“鏡子：喀敢泥”という例である。漢語“鏡子”は琉球語の「鏡」を表すものであるが、現代琉球方言では/kagan/となっている。もし、“喀敢泥”が現代と同じ発音を示すのなら“泥”が/n/音を表す可能性が生じる。“敢”が/-m/韻尾で読まれる漢語方言はあるが、歯茎鼻音の“泥”(泥母齊韻)が両唇鼻音の/mi/音に読まれる現代漢語方言はないからである。

表9にあるように『中山傳信録』以前の資料では現代琉球語の撥音に当たる音節は主に/尼/を使って/ni/と表現されていたが、『傳信録』以降では鼻音韻尾をもつ寄語への変更が行われている。

¹⁶ 蕭崇業で三：膩という用例が一つのみあるが、誤植か。

表 9

提示語	陳侃	琉譚	蕭崇業	夏子陽	傳信録	見聞録
天	甸尼	甸尼	甸尼	甸尼	町	廳
狗	亦奴	亦奴	亦奴	亦奴	因	なし
飯	翁班尼	翁班尼	汪班尼	汪班尼	叻班	翁班

“尼”寄語としては語中・語尾の「ニ」に使われ、語頭に使われている用例は一例もなく、語頭の「ニ」音には“膩”(娘母至韻)が使われている。現代蘇州語の白読音で[n]とあるから、この点から“泥”の示す読音は[ni]よりも母音成分の弱い音だった可能性がある。

2. 3. 3 『中山傳信録』まとめ

『中山傳信録』ではネとニを、「字母」では区別し、「琉語」では区別していない。これは漢字を当てる際の状況が左右した可能性がある。つまり、実際に仮名文字を参照し、その違いを確認して発音を聴き、漢字を当てる「字母」と、漢語語彙の発音を(恐らく口頭で)書き取った「琉語」では音に対する注意の払い方に違いがあったとも考えられる。また、ネ音の出現環境が殆ど語末であったことも、たとえネ音とニ音に区別があったとしても、それらの弁別に支障を来したかもしれない。

2. 4 『琉球入学見聞録』(1768)

2. 4. 1 「字母」

徐葆光の『中山傳信録』の「字母」に相当する仮名とその漢字による音注が末尾に書かれている。これは徐葆光の「字母」を訂正したものである¹⁷が、二音に対しては“義”、「子」と書かれるネ音に対しては“你”をあてている。丁鋒2008は西南官話の安郷方言の特徴を反映しているとするが、現代安郷方言の発音をあてると以下のようにになっている。

¹⁷ 訂正状況からみると、『見聞録』の基礎方言は少なくとも口“樓”≠“魯”、又“樓”≠“奴”、ヨ“攸”≠“天”、ツ“自”≠“即”、ム“某”≠“木”、シ“實”≠“志”、ヒ“須”≠“蜚”、モ“莫”≠“毛”であり、これらの条件をみたます地域である。これについては別稿を用意している。

表10

	安郷方言	福州方言
你(ネ)	li	ni
義(ニ)	li	ŋie

安郷方言では両音に区別がないばかりかいずれも有声歯茎接近側面音/l-/になっている。丁鋒2008は寄語の基礎方言を安郷方言とする根拠として、ナ行音に来母/l-/字、ラ行音に泥母/n-/字を用いていることから、n/lを分けていなかった方言を根拠の一つに挙げている。その用例をみると、確かに来母と泥母は混同されている。それはそもそも、安郷方言ではネ音と二音の区別はおろか/n-/音自体が存在せず、/l-/音のみしかないからである。

【来母を泥母と混同した例】

雹：阿那禮/arare/

筭盤：述奴班/suruban/

【泥母と来母を混同した例】

沙：息拉/şina/

行船：混利搭兀已/huni/

渡：混利搭塔已/huni/

初九：之塔之酷古盧咯/ çiitaçikukunuka/

来母/l-/と泥母/n-/を混同する漢語方言は数多く、福州方言もその一つである。福州ではnとlの混同の結果、音声としては/n-/音で発音される。その上、福州方言の連読音変を考慮すれば、上記の例が必ずしも来母と泥母の混用とは言いきれない例もある。

例えば、行船：混利酷兀已、渡：混利哇搭已の例から“混利”は「船」（現代首里方言でフニ/huni/）を示している。“利”の中古の音韻位置は来母至韻で/l-/音に基づくため、そのまま安郷方言で読むと/xuən li/となり琉球語としては些か不自然である。しかし、“船”の発音においてはこの“混”の韻尾の音色が“利”の発音に影響した可能性がある。“利”の発音の前の“混”が韻尾/-n/をもつ陽性韻である。現代福州方言では連続する2音節の前の音節が鼻音韻尾であった場合、後続する/l-/の声母が/n-/に変化する連読音変の現象がみられる。つ

まり、福州方言の連読音変を想定してこの寄語の“混利”を読んだ場合、/xouŋni/となり、琉球語と合致するのである¹⁸。また、『見聞録』には「字母」や「土音」の編纂に琉球官生が大に関わっている。『見聞録』では「土音」の末尾に以下のように記されている。

以上皆入學官生等所逐日口説而手書之者、與徐録多異。(以上はみな入学官生などが毎日口でいい、手で書いたもので、徐葆光『中山傳信録』とは多く異なるところがある。)

福州に長く滞在した官生が安郷方言を身につけていたとは考えにくい。さらに『琉球入學見聞録』の「字母」は『中山傳信録』の「字母」を参照し、合致しない発音については“口本音樓誤作魯”と割注を入れてわざわざ訂正し、とりわけ注意を払っている。しかし、ネとニの“你”と“義”には訂正していないところをみると、そのままの区別でも問題がなかったということを示している。「字母」の基礎方言がどこかにより、ナ行工段とイ段が同音であったか否かが変わるため、ナ行工段とイ段が区別されていたかの結論は難しいが、先行する資料では同漢字が使われている以上、両音には区別があったととらえるのが妥当であろう。

2.4.2 「土音」

次に対訳形式の「土音」の項をみるが、この体裁は陳侃、『傳信録』と同様である。ここでもナ行工段音とイ段音ともに“泥”字が使われている。ナ行イ段の“泥”は“二十三”～“二十六”までは語頭にも使われているが、“二十七”～“二十九”は何故か工段では使われてはいない“膩”に置き換わっている。工段専用の寄語は“你”、イ段専用の寄語は“逆”である。“逆”のみが新出の寄語である。

¹⁸ その他、琉球語のジを表す“字：日”（琉球語のジを表す）の対応のように“日”を/ʔ/と発音する安郷方言では合わず、福州音で合致する例も多い。また“東：熏哈失”、“雷：堪理”など福州音の連読音変を考慮すればよく合致する類例もある。詳細は別稿参照。

表11

	北京	湖南 安郷	蘇州	温州	長沙	南昌	梅県	福州	廈門	広州
泥(ネ/二)	ni	li	ɲi	ɲi	ɲi	ɲi	ni/nai	nɛ	ni/le	nɛi
你(ネ)	ni	li	ni/n	ɲi	ni/n	ɲi/n	ni/ŋ	ni	ni/li	nei
逆(二)	ni	li	ɲi?	ɲiai	ɲi	ɲit	ɲiak	ɲi	gik	jik/ɲak
膩(二)	ni	li	ɲi	ɲi	ɲi/ɲi	ɲi	ni	ni	ni/li	nei

『琉球入學見聞録』の寄語の基礎音系がいずれであるのかが問題である。現代安郷方言を調査した応雨田1994では上表の如く、全て/li/音になっている。そもそも、基礎方言が安郷の場合、ナ行工段やイ段はおろか、ナ行音とラ行音さえも区別ができない状況だったことになる。

【ナ行工段】

睡(ねる)：寧蒂/nindju/

缸(ふね)：弗你/huni/

木杓(ねぶ¹⁹)：你波(ネブ)

行船(船を操縦する)：混利酷兀巳

酒盃(さかずき)：失六加泥(シロカニ)

金(こがね)：枯喀泥(コガネ)/kugani/

銅(あかがね)：阿噶喀泥(アカガネ)

鐵(くろがね)：窟碌喀泥(クロガネ)

霞(かすみ)：噶喀泥(未詳語)

【ナ行イ段】

西(にし)：逆失/nisi/

園(にわ)：逆哇/niwa/

二月(2月)：膩刮止/nigwatsi/

十二月(12月)：蔞膩刮止/zuunigwaç/

¹⁹ 『沖縄古語大辞典』に「柄杓。祭りでは主に酒を汲む道具として用いる。」

- 二十二(22)：泥肉泥泥止/nizuuniniçi
 二十三(23)：泥蓐三泥止/nizuusaNniçi/
 二十四(24)：泥蓐蓐マ喀/nizuujukka/
 二十五(25)：泥蓐古泥止/nizuuguniçi/
 二十六(26)：泥蓐魯古泥止/nizuurukuniçi/
 二十七(27)：膩蓐失止泥止/nizuusiçiniçi/
 二十八(28)：膩蓐滑止泥止/nizuuhaçiniçi/
 二十九(29)：膩蓐酷泥止/nizuukukuniçi/
 三十(30)：三蓐泥止/sanjuuniçi/

ナ行イ段の例の殆どは数字“二”に関わる項目である。語のパラエティとしては決して多いとは言えない。

2.4.3 『琉球入學見聞録』まとめ

『琉球入學見聞録』の「字母」ではナ行工段とイ段を区別しているが、「土音」では“泥”が共用されているので、混同しているようにみえる。しかし、混同が観られる項目は全て以前の資料に存在した項目である。だが、新たに寄語が変更された項目については、ナ行工段に“你”、イ段に“逆”のように中古音韻位置では、違いが見られる例もある。この点が区別を意図したものである可能性があるが、それをもってナ行工段音とイ段音が当該資料で使い分けがあったと断定するには根拠がやや弱いように思われる。しかし、陳侃、『傳信録』、『見聞録』を比較すると、ナ行工段とイ段の項目については、両音を分ける兆候が次第に強くなっている印象である。だが、語料が少ないため、この資料だけでは音節全体を議論するだけの材料が不足していると言わざるを得ない。

2.5 『琉球譯』(1800)

次に李鼎元による漢琉発音辞書『琉球譯』をみる。本書は漢語資料のなかでも先行資料とは構成や内容が異なり、他資料からの継承がみられず、一定の均一性が担保されている。この点が他の漢語資料とは一線を画している。本書は

漢字の音読みを示した「譯音」と訓読みを表す「譯訓」からなる。まず「譯音」のナ行工段音をみると以下の一例のみがある。

年念俱讀若寧(“年”、“念”はともに“寧”字のように読む。)

この例だけでは“年”や“念”の音読みが「ネン」なのか「ニン」なのか判然としない。現代漢語方言においては、浙南吳語、粵語の白読、一部の閩語地域を除き、いずれも主母音に[-i]をもっている。

「譯音」におけるナ行イ段音に関係する項目は以下の二カ所である。いずれも寄語“宜”で注音されている。のちにみるようにナ行工段音に使われる“你”は使われていない。

二貳俱讀若宜(“二”、“貳”はともに“宜”字のように読む。)

肉讀若宜(“肉”は“宜”のように読む。)

では「譯訓」をみてみよう。こちらは語料が比較的多く、多くの語彙の発音に関する情報が得られる。ナ行工段音には“你”“寧”が、ナ行イ段には“宜”“泥”が用いられ、両者は厳密に使い分けられている。“慇懃懇：寧古祿”の用例は上記の「譯音」の“年念俱讀若寧”と対応する。

仮にナ行工段とイ段が同じ音価であったなら、工段にもイ段にも“你”や“宜”が混在していたと考えられるが、両者が截然と棲み分られることから、両者には音声的区別が存したと思われる。以下がその例である。

【ナ行工段】

睡眠寝(ねむる)：你木祿/ninzun/

媚嫉(ねたむ)：你答木

上船(船に乗る)：福你宜奴祿/hunininuru/

比屋根(ひやね)：許牙滾/hiyane/

骸(ほね)：父你/huni/

舟艘眺眺船舫舩艘：父你/huni/

籛艘(いくさ船)：一古煞父你/ikusa huni/
舩艇艘(こぶね)：古父你/kubuni/
慇懃(ねんごろ)：寧古祿
三年一閏(さんねん一うるう?)：三寧宜一子武六
念珠(ねんじゆ)：寧叔

【ナ行イ段音】

颯(にわか風)：宜瓦喀喀即
混淆(にごる)：宜古祿/mingwijun/
凍(にわか雨)：宜瓦喀阿眉
荊豫冀梁青徐揚兗雍益幽(国の名)：古宜奴那
愴(にくむ)：宜古木/nikunuN/
蹂(ふみにじる)：服米宜日祿
逋(にげる)：泥及祿
掘(にじる)：宜日祿
憎(にくむ)：宜骨木/nikunuN/
瞪(にらむ)：宜喇米
鈍(にぶし)：宜不石
急勃遽頓(にわか)：宜瓦喀
醜(みにくし)：米宜古石
肖(にる)：宜祿/nijuN/
古(いにしえ)：一宜時
何(なに)：那宜/naN/
似(にたり)：宜答力
豈(あに)：阿宜
毎日(まいにち)：没宜及
致謝(感謝する)：宜孩/nihwee/
上船(船に乗る)：福你宜奴祿
鬧熟(にぎやか)：宜及牙喀/nigijaka/

三年一閏:三寧宜一子武六
 西(にし): 宜石/nisi/
 日(にち): 泥子/niçi/
 晦日(かいにち?): 怪宜及
 節(せつくにち): 些古宜即
 二十八宿(にじゅうはっしゅく): 宜如法叔古
 邦州(くに): 古宜/kuni/
 恙(にしのいびし): 宜石奴一必息
 西原(にしはら): 宜什八納
 安仁屋(あにや): 安宜雅
 粟國(あぐに): 阿古宜
 兄(あに): 阿宜/ani/
 鬼魅魔魑魍魎(おに): 武宜/uni/
 亭庭廷(にわ): 宜瓦/niwa/
 酒杯(さかづき): 失六加泥
 烹煮(にる): 宜禄/nijuN/
 苦(にがり): 宜喀利
 澗溪硤谷(たに): 答宜/tani/
 籩(ながきたに): 那喀及答宜
 花葩葩(はな): 法那/hwana/
 韭(にら): 宜喇
 榆(にれ): 宜力
 牲(いけにえ): 一及宜
 雞(にわとり): 宜瓦獨力/niwatui/

では、“你”と“宜”の発音が各方言でどのようになっているかみてみよう。

表12

	北京	成都	蘇州	温州	長沙	梅県	福州	廈門	広州
你	ni	ni	ni/ŋ	ni	ni/n	ni/ŋ	ni	ni/li	nei
宜	i	ni/i	ŋi	pi/ŋ	pi/i	pi	ŋi/ŋe	gi	ji

舌音の鼻音/n/が反映されている成都、蘇州、長沙、梅県では、子音の口蓋化の有無で両音を区別している。その他の地域も何らかのかたちで両音を区別していることが分かるであろう。基礎方言がどこの地域であれ、両者には音声的区別が存していると考えられる。

2.6 『漂海始末』(1818)

1818年『漂海始末』においては、イ段音とエ段音がハングルで書き分けられており、概ねイ段音はㅁ|/i/,エ段音はㅅ|/ui/の母音で表されている²⁰。ではナ行エ段とイ段に関わる用例を見てみよう。

ナ行エ段

ナ行イ段音

船：후늑|/hu nui/

毎日：ㅁ|늑치|/mɔi ni tsi/

錢：칸의|/kan ui/

語料が少ないが、この例をみる限り、ナ行エ段音とイ段音を意図的に区別しようとする意図が伺える²¹。エ段音にㅅ|の母音を使用するのは、継承関係のない1501年の「語音翻訳」と同様の傾向である点が注目される。この時代のこの状況から翻って、「語音翻訳」でのナ行エ段とイ段が子音と母音の口蓋化の有無のような、微妙な差であったと伺える。

2.7 THE LOO-CHOO LANGUAGE(1818)(クリフォード語彙)

クリフォード語彙は1818年にロンドンで出版されたCaptain Basil HallのAccount of a voyage of discovery to the westcoast of Corea and the Great Loo-choo Islandの附録として掲載されたものである。クリフォード語彙は漢語資料同様、約400余りの語彙しか収録しておらず、ナ行エ段もイ段も/ee/いう表記で書かれ、両音を区別をしていない。

【ナ行エ段音】

hannee(羽)

²⁰ 多和田1994は「/e/から/i/に変化する過渡的狀態を反映していると解される。」とする。『漂海始末』において“筆”は후늑|/hu tui/、時代が遡る「語音翻訳」においては“筆”은늑|/phun ti/と-/i/で書かれている。

²¹

gaanee(蟹)

ship : Hoonee

Year : Ning

【ナ行イ段音】

Two : Nee

亀井孝(1979)に「わずか四十日ほどの逗留のあいだにはじめて学んだあたらしい言語のその集録であるから、いまだいろいろと不完全なところののこるべきは言うを俟たぬ」とある。確かにこの状況では、譬え琉球語に[ni]/[ni]の区別が存在したとしても、それを認識し、峻別することは困難であったかも知れない。

2.8 ベッテルハイム『英琉辞書』1851

倉卒の間に琉球語を書き記したクリフォードに比し、8年間という長きにわたって沖縄に滞在したベッテルハイムの書き残した琉球語は、質量ともにクリフォードのそれとは異なっている。ベッテルハイムの『英琉辞書』はナ行工段に対してはni、ナ行イ段に対してはnyiという形式で両音を区別している。伊波和正(1998)は両音の違いについて、以下のように述べている。

Elements or Contributions towards a Loochooan and Japanese Grammar (1849年『琉球語と日本語の文法の要綱』)では、琉球語のIfofa<イロハ>を解説し、「子(ネ)」は [ni]、「二」は [nyi] と明示している。

分析所見：筆者は先に「niとnyiの表記上の区別はクリフォードにはないが、ベッテルハイムは90%以上の正確さで表記上区別している。」と書いたが、本稿における分析の結果から「99%以上の正確さ」と訂正したい。

上記を裏付ける根拠は枚挙に暇がないのでその一部の具体例を示すと以下のようになる。

NI(ナ行工段音)

ague nitsi(熱病)
nizimi(squirrel : 鼠)
hiap-kogani(黄金)
lade funinyi nyi tsinyun(船に荷を積む)
胸 'nni, muni

NYI(ナ行イ段音)

西 nyishi
日 ichinyichi ni nyidu(一日に二度)
蟹 gānyi, tā-ganyi

2. 9 Basil Hall Chamberlain(1895) "*Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan Language*"

Chamberlainの琉球語に関する記述では、ナ行工段とイ段は使い分けがされていない。p.14,p.28には以下の「蟹」と「ネギ」の例を挙げて、以下のように表記している。

Luchuan	Japanese	
gani	kani	"a crab"
niji	negi	"an onion"

双方ともniという形で書き表されている。p.62,233,208,234の関連語を挙げると以下ようになる。原文にはないが日本語訳を後ろに()に入れて書き入れておく。

【ナ行工段音】

Nī, a root (根)
Nitsi, Fever (熱)
Huni, a vessel, a ship (舟)
Huni, a bone (骨)
Ning, a year(年)

【ナ行イ段音】

Nī, two(二)

Niwa, a garden(庭)

Ni-mutsi, baggage, luggage(荷物)

これをみると、ナ行工段とイ段が全く同じ音になって合流していることになる。しかし、伊波普猷(1975)p.576は次のように述べる。

琉球語ではネから転じたniは欧羅巴流に発音し、在来の二は国語流に口蓋化して発音し、二者を区別するので、護得久氏もはつきり区別して居られたが、『沖縄対話』には両方共ニと書いて区別してゐない。チエムバレン先生も両方共にniにして居られるが、これはその頃、今の琉球語のやうに、在来の二がなくなつて、ネから転じたものとの間に、区別がつかなくなつてゐた筈はないから、チエムバレン先生が注意して聞かれなかつた為と思はれる。

このように実際には存在した区別を聞き落としている可能性が示唆されている。この状況は次節2.10でみるようにHaguenaueの記述に裏付けられる。

2.10 Charles Haguenaue(1930)

対訳資料の最後に沖縄を訪れて記録を残したCharles Haguenaueのノートをみてみよう。Beillevaire(2010)には3カ所にわたってナ行工段とイ段に関する記述が見られるが、p.16には以下のように書かれている。

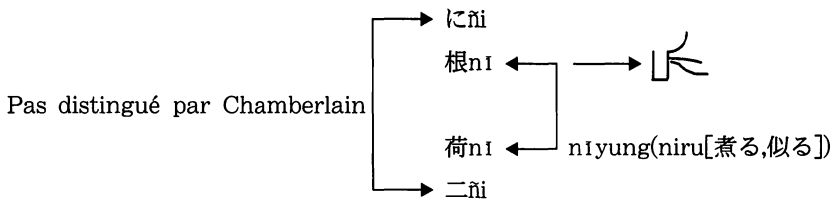
Chamberlain n'a pas noté([â]Shuri c'est disparu) :

1) に ñi	} Shuri c'est disparu
ニ	
2) 根 ni	

「チエムバレンは「に」と「根」の区別に気づいていなかった」、「首里では失われている」としている。Haguenaueの音注によると「に」ñi、根niとい

う形で注記がされている。この意図は、チェンバレンは首里方言が区別を失っているとしているのに、自分自身はその区別に気づいていることを述べたのであろう。またNni=très forte nasale(le riz[jp.ine稲])とあり、Nniが「とても強い鼻音」であることを示している。

さらに、同書p.281(Aspects de Phonétique Ryūkyū : 琉球語音の諸相)の章には以下のように書かれている。



Hagenauerのこの記述は、首里に関するノートの最後の4頁が費やされているので、当時の実際の首里方言を表しているものと思われる。ここでも「チェンバレンによって区別されていない」とある。チェンバレンが区別していないのは、「に」「根」「荷」「二」の4語である。Hagenauerの4語の後ろにある音注は異なっている。つまりナ行工段の「根」とナ行イ段の「に」「二」は子音はtildeの有無、母音は長短によって区別されるようである。そして、右の歯と歯茎、そして舌先を表したイラストは、「根」の読音において舌先が前歯の裏側に位置して未だ口蓋化していないことを表している。/ñ/の符号はフランス語では本来鼻音を表すが、この場合は口蓋化していること示しているとみてよかろう。ただ、ナ行イ段音の「荷」が「根」と同じ発音となっているのは、如何なる理由があるのかは不明である。またp.282には首里方言の発音について記述をしている。

葉fa : un peu fermeture, mes les lèvres ne touchant pas.

歯hã : ouverture et souffle

funi : bateau

これを訳すと、「葉fa：少し閉じているが、両方の唇は接触していない」となり、IPAで示すと無声両唇摩擦音[ɸa]、「歯」の項は「hā:開き、気音」で[xa]もしくは[ha]となる。最後は「船」を表す発音がfuniとなり、そのフランス語訳bateauが書かれるが、ナ行工段に由来する船の発音が/funi/という、上述の説明に照らせば口蓋化していない形式になっている点が注目される。

因みにBeillevoire(2010)pp.207-208には名護で収集された語彙が記されているが、ここでは、「船」はpuni、「骨」はp'uni(léger h²² (p'uni bateau))、蟹ganiと表記されており、ナ行工段とイ段は区別されていない。

3. 仮名資料におけるナ行工段とイ段

3.1 『おもろさうし』

『おもろさうし』におけるナ行工段音は、多くは仮名の「な」を以て記されている。

ねうしか 時かみか時 しらたる いちよか～ ころた(2巻596)
とよむ くにの ね くにの ねに あつる はやふさ(2巻53)

数少ない例外が、高橋の指摘する「かね」と「かに」の混用である。これが[ni]と[ni]の合流を示しているのか、未だ狭母音化の状態[ni]にとどまり、[ni]とは依然として区別を有していたかは、この資料からは判別できない。

これには文字としての仮名の限界もある。[ni]音と[ni]音を区別する仮名表記が当時には存在しなかったからである。子音の違いを表すには専用の仮名を創造するか、特別な符号を用意しなくてはならない。伊波のように[ni]音と[ni]音を区別するために「ニ」と「ネイ」という表記を採用することも可能であるが、当時に両音を書き分ける発想や必要があったのかは疑問である。当時は「ネイ」のように拗音や促音を小書きにする習慣もないのである。

²² 「軽いh」の意。

3.2 『混効験集』(1711)

では、仮名資料として1711年に成立した琉和辞書『混効験集』²²をみてみよう。首里王府の編纂で、仮名遣いには十分配慮されているためか、以下にみるようにネとニの混同は見られない。

ねずへるものどおほいよとる 物事に能堪忍せよと云事なり物ねず共云(坤・言語)

おねたさ 同上(いかり給ふを云 逆鱗也)源氏葵の巻にねたさになんとの給へはと有(坤・言語)

ねふさ 遅事ヲ云 源氏物語ににふきと有 其時はヲロカナル心也 利鈍の字ナリ(坤・言語)

ねぶりをり 眠折 俗にねむじやれ(乾・器財)

3.3 『沖繩対話』(1880)

沖縄県学務課編『沖繩対話』は1880年(明治13)12月に発行した共通語と首里方言の対訳資料である。伊波普猷は『沖繩対話』ではナ行エ段音とイ段音が区別されていないことを述べているが、下にみるように両音はともに「ニ」と書かれ、区別されていない²¹。原文に加えて、現代首里方言を/ /で示す。

【ナ行エ段音】

ニー 子/nii/

ニーブ 柄杓

ネツ 熱/niçi/

フニ 船/huni/

【ナ行イ段音】

ニングワツ 二月/ningwaçi/

ニシ 西/nisi/

²² テキストは外間守善(1970)。

²³ 音節全体の状況は伊波和正(1996b)参照。

クニ 国/kuni/

ガニ 蟹/gani/

ニヅクイ 荷造り/niizukui/

『沖縄對話』は首里出身の話者によって書かれてはいるが、その目的は多く沖縄人をして標準語を習得せしめることである。恐らく、2.10にあるように名護ではナ行工段とイ段は失われ、首里以外では区別が失われていたと考えられ、琉球語の表記に執着する必要がなかったことも十分に考えられる。

3.4 伊波普猷 昭和7年3月(1932)

伊波の書き残しているナ行工段とイ段の区別は本稿「はじめに」で言及しているが、『伊波普猷全集』第十一巻(p.96)「琉球語大辞典〔草稿〕」には具体例も挙げて両者を区別している。そこには〔ニ〕という項目の他に〔ni〕という項目を立て、仮名では「ネィ」と表記している。〔ニ〕にはナ行イ段に由来する項目が書かれ、〔ni〕にはナ行工段の項目が列挙されている。その一部を抜粋する。

〔ni〕

ネィー 近辺。根。事の根本。値段。側-際。子の時即ち前九時頃より正午〔夜の十一時-一時〕頃迄の間。

ni:ndzjijun 三味線や歌の音が冴える。

ネィーカラ 全く。断然。

ネィーシュン 値段が出る-値が上がる。

ネィートウイ 根取り。八月踊の踊子を指揮する者。青年の主立つた者が当たる。

ネィーティー 子の日。

ネィーピチ 嫁入。

ネィーピラー 野蒜

ネィーブイユン 寝付く。

ni:buji 眠気。

nigajun 願ふ。

ネイツイ 熱。

ネイン 或る仕事に専念する者。

ネインデュン 寝る。

ふネイハラシエー 競漕

ウーネイ 親船-本船。

kani 金属

クガネイブーブー こがね虫。

クガネイングワ 愛児。

サネイ 核。種類。

サバネイ 剝舟-糸満の漁夫の用ゐる舟。

サンネインチ 三年忌。

[二]

ニー 荷物

ニーセー 青年

ŋpi 稲

ニシ 便所。北の方。

ニシカズィ 北風。

ニタミュン 憎む-ねたむ。

ニデュン 握る。

ニワ 庭。家の前の義。

ŋwi 臭ひ。

ニングワツィ 二月の月。

ガニ 蟹。女陰の隠語。

おわりに

表13にナ行工段とイ段の分合状況をまとめた。もちろん、上に述べてきたように分析対象の多寡や例外的な状況もあるが、おおよそにおいて各資料ではど

のようになっているかを示したものである。「分析対象項目」は分析可能な項目のバラエティを示し、5語以下を「少」としている。ネ／ニの項目の「分」は両音を区別し、「同」は区別していないことを示す。

表13

	分析対象項目	使用文字	ネ／ニ
語音翻訳(1501)	少	ハングル	分
陳侃「夷字」(1535)	少	漢字	同
陳侃「夷語」(1535)	少	漢字	同
おもろさうし	多	仮名	分
混効験集(1711)	多	仮名	分
中山傳信録「字母」(1721)	少	漢字	分
中山傳信録「琉語」(1721)	少	漢字	同
琉球入學見聞録「字母」(1764)	少	漢字	分
琉球入學見聞録「土音」(1764)	少	漢字	同
琉球訳(1800)	多	漢字	分
漂海始末(1818)	少	ハングル	分
Clifford(1818)	少	ローマ字	同
Bettelheim(1851)	多	ローマ字	分
『沖繩対話』(1880)	多	仮名	同
Chamberlain(1895)	多	ローマ字	同
Haguenauer(1930)	少	ローマ字	分
伊波普猷(1932)	多	仮名+ローマ字	分

ハングル資料やローマ字資料は比較的両音を区別し、漢字(対訳語)や仮名の資料では同じ発音として処理する傾向がみられる。各資料の編纂環境からみれば、語料が多く比較的編纂に時間と労力をかけたと思いき資料が両音の微細な差を書き分け、編纂期間も短く語料も少ない、漢語資料のように既存の文献に全面的に依拠した資料についてはその差異を峻別していない。こうしてみると資料的な価値は決して均一ではないことが分かるであろう。

16世紀、17世紀の漢語資料が両音をかき分けていないのには相応の理由があ

ろう。第一に資料の性質、信憑性にかかわる問題である。もともと漢語資料は語料が少ない。先行資料から継承された項目や誤字や未詳語を除くと、その時代を反映した確度の高い語料はさらに少なくなる。もう一つ、特に漢語資料については、音訳者の母語によって、ナ行工段とイ段の弁別が不可能であったか、あるいは難しかった可能性がある。また、そもそも扱う語料が少なかったために資料編纂に携わる人々が区別に気づかなかった可能性もあろう。これは陳侃「夷語」、徐葆光『中山傳信録』、「琉語」、『琉球入學見聞録』、「クリフォード語彙」に共通した状況である。

一方、比較的編纂が短く、語料が少なかったとしても、ハングルという文字の性格上両音をかき分けやすかった「語音翻訳」や「漂海始末」、編纂時間の長かったベッテルハイムの『英琉辞書』、自らも言語学者であった伊波普猷が微細な差に気づいたことは、当該言語に区別が存在する以上、必然であったと思われる。

我々は漢字や仮名、ハングル、ローマ字の表音能力の範囲と限界を十分に考慮する必要がある。資料が反映する琉球語の位相が口語か文語か、仮名などの活字で書かれたものを寄語として写したのか、発音を聴いて書き取ったものなのか、資料の編纂方法も不明な点は多い。こうした状況を考慮すると、本稿で扱った以外の他の音韻項目についても再検討を要する部分が多く残されていると思われる。

【参考文献】

- H.J.クリフォード『クリフォード琉球語彙』勉誠社文庫(71)
- 石崎博志(2001a)「漢語資料による琉球語研究と琉球資料による官話研究について」『日本東洋文化論集』(7):55-98 琉球大学法文学部
- 石崎博志(2001b)「『琉球譯』の基礎音系」『沖縄文化』(92):1-24沖縄文化研究所
- 石崎博志(2010)「徐葆光『中山傳信録』の寄語と琉球語について」2010年3月琉球大学法文学部『日本東洋文化論集』16.pp.39-66
- 伊波和正(1996a)「クリフォードとベッテルハイム：琉球語比較」『沖縄国際大学文学部紀要(英文学科篇)』第15巻1号

- 伊波和正(1996b)「『沖縄対話』単語編:比較研究」『琉球の方言』(21)pp.85-121, 法政大学沖縄文化研究所.
- 伊波和正(1998)「ベッテルハイム『英琉辞書』: NI,NYI」Journal of foreign languages, Okinawa International University 3(1) pp.307-328沖縄国際大学外国語学会
- 伊波普猷(1975)『伊波普猷全集第八巻』平凡社
- 伊波普猷(1976)『伊波普猷全集第十巻』平凡社
- 上野善道(1992)「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文化研究』21,pp41-160.東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 亀井孝(1979)「解説」『クリフォード琉球語彙』勉誠社文庫71
- 喜名朝昭・伊波和正・森庸夫・高橋俊三訳「ベッテルハイム著『琉球語と日本語の文法の要綱』」『南島文化』(1983—1984) 2-6.
- 錢乃榮(1992)『当代吳語研究』上海教育出版社
- 高橋俊三(1991)『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院
- 多和田真一郎(1984)「『クリフォード琉球語彙』琉英配列語彙」『琉球の方言』9号
- 多和田真一郎(1994)『「琉球・呂宋漂海録」の研究-二百年前の琉球・呂宋の民俗・言語-』武蔵野書院
- 多和田真一郎(2010)『沖縄語音韻の歴史的研究』溪水社
- 丁鋒(2006)《陳侃〈使琉球録・夷字〉所記琉球假名對音反映的明代吳語寧波音》,『語言學探索——竺家寧先生六秩壽慶論文集』(竺家寧先生六秩壽慶籌備會編 國家圖書館出版品預行 編目資料)所收, 2006年6月
- 外間守善(1970)編著『混効驗集 校本と研究』角川書店
- Beillevaire(2010) : Parrick Beillevaire 編著 "Okinawa1930. Notes ethnographiques de Charles Haguenaer." Collège de France Institut des Hautes Études Japonaises. Diffusion De Boccard Paris :2010
- Basil Hall Chamberlain(1895)"Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan Language" Tokyo : Z.P.Maruya & Co.